

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(三八地区) (第1回) 概要

日時：令和2年9月10日(木)

13:30～16:00

場所：八戸プラザホテル

2階 プラザホール

<出席者>

委員

友田 博文 委員、澤田 尚 委員、高橋 力也 委員、丸岡 博 委員、
岡田 稔 委員、石橋 伸之 委員、小橋 良和 委員、野田 尚志 委員、
中野 正信 委員、武士澤勝利 委員、今井 裕一 委員、三浦 勉 委員、
里村 智彦 委員、高谷 正 委員、久慈 恵司 委員(進行役)

オブザーバー

一戸 利則 県立八戸高等学校長、 黒坂 孝 県立八戸東高等学校長、
渡辺 学 県立八戸西高等学校長、 冨田 義明 県立三戸高等学校長、
清川 和幸 県立五戸高等学校長、 小野 淳美 県立田子高等学校長、
浅利 成就 県立名久井農業高等学校長、 福嶋 信 県立八戸水産高等学校長、
瀬川 浩 県立八戸工業高等学校長、 久保敬悦朗 県立八戸商業高等学校長、
大崎 光幸 県立八戸高等支援学校長

1 開会

2 委員紹介

3 事務局説明

(1) 青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会設置要綱

- 事務局から、資料1について説明した。

(2) 地区意見交換会の進め方と今後のスケジュール

- 事務局から、資料3について説明し了承された。

(3) 高等学校教育改革に係る経緯について

- 事務局から、資料5から資料6について説明した。

- 進行役から、基本方針の地域校の記載にある「学校と地域等が一体となった検討を促す」とは、どのような取組を想定しているのか、事務局に確認があった。

→ (事務局) 第1期実施計画では1学級規模の地域校を4校配置したが、入学

者数がいずれも2年間継続して20人未満となっているなど、地域校で入学者数の確保が課題となっている。

このことを踏まえ、地域校については入学者数の確保に向け、教育環境の更なる充実を図る必要があると考えており、市町村関係者や学校関係者など、地域等の関係者に協力を呼びかけながら、学校と地域等が一体となって、学校の活性化に向けた方策について検討していただく機会を設定することを想定している。

4 意見交換

(1) 学校規模・配置の検討について

■ 事務局から、資料7から資料8について説明した。

■ 進行役から、三八地区では地域校に該当する高校があるのか事務局に確認があった。

→ (事務局) 基本方針において、地域校は学校規模の標準を満たさない高校のうち、路線の整備状況、利用時間帯、利用時間などの公共交通機関の状況を考慮して、総合的に判断した上で配置することとしており、第2期実施計画において、三八地区では三戸高校が該当すると考えられることから、三戸高校を地域校として配置する場合は、第2期実施計画期間中における期間内増減数マイナス3学級から当該校分を除き、マイナス2学級として御検討いただきたい。

■ 進行役から、三八地区の学校規模・配置について、全委員に意見を求めた。

○ 三戸町では小中一貫教育に取り組んでおり、小中一貫9年間と高校3年間で結んで、小中高12年間で三戸町の児童生徒を育む教育を進めるため、平成25年に三戸町内の全ての小中学校と三戸高校で連携協定を結んでいる。具体的には、三戸高校の生徒が夏休みに小学校へ出向き、小学生に勉強を教える「三戸寺子屋教室」や、三戸町の独自教科である立志科の「ようこそ先輩」の授業の発表、また、杉沢小中学校の文化祭や運動会等の活動に参加するなど、様々な教育活動において連携しており、学力向上や郷土に誇りを持つ児童生徒の教育に効果を上げている。三戸町の小中高12年間を通じた教育を進めていく上でも、第2期実施計画において三戸高校の存続を強く要望する。

文部科学省では、これまでの普通科を普通科、地域探究科、学際融合科の3科体制にする高校教育改革を進めている。三戸郡の五戸高校と田子高校は令和3年度末に閉校となるが、三戸高校には、三戸郡はもとより、八戸市、さらには岩手県北からの入学者がおり、普通科希望者の広域な受け皿となっている。国の高校教育改革による新しい普通科の教育制度の考え方からも、三戸郡に普通科の高校を残していただきたい。

また、三戸郡の主要産業は農業であり、名久井農業高校を残していただきたい。さらに、県教育委員会では高校への通学が困難な地域の高校生へ配慮し、

地域校を設けているが、地域校に指定されている田子高校が閉校となると、三戸郡には地域校がなくなる。三戸郡は山間部の町村が多く、通学のための交通が不便な地域が多く、その観点からも三戸高校は地域校的な役割を担う普通高校として存続をお願いしたい。

- これまでも丁寧に説明しながら対応してきたことと思うが、今後、学級減や統廃合の対象となる高校が所在する市町村に対しては十分に寄り添い、一層丁寧に対応していただきたい。

学校規模が4学級以上が望ましいことは、事務局説明から分かったが、子どもたちの多様な教育を受ける機会を設ける意味で、八戸水産高校、八戸商業高校、名久井農業高校は学校規模の標準を満たしていないが存続させ、子どもたちに選択肢を与えていただきたい。また、三戸郡に子どもたちの目標となる高校が残れば良いと思う。

また、新郷村立野沢中学校から公共交通機関を使用して通学できる高校は、唯一五戸高校だけであったが、第1期実施計画では五戸高校は地域校に指定されなかった。同様の地域が県内に存在する可能性は否定できないので、地域校については精査し検討していただきたい。

- 第1期実施計画策定時の地区意見交換会において、郡部校をできるだけ存続することを要望した。人口だけを見れば、八戸市が圧倒的に多く郡部が少なくなっており、学級数の減に対応するために郡部の高校を募集停止にするのは、手っ取り早い方法かと思うが、是非とも三戸高校を存続してほしい。

また、三戸町及び南部町には青い森鉄道が通っており、八戸市内や岩手県北からも通学できる地域となっていることも考慮し、三戸郡内の高校をできるだけ存続してほしい。

基本方針において本県の未来を担う人財の育成について、「地域を支える人財の育成」や「産業の発展に貢献する人財の育成」を掲げているので、この地域で生まれ育った子どもたちが、郡部に貢献できる人財となるよう三戸郡内の高校を存続してほしい。

事務局から学級数が減少すれば開設科目が減るという説明があったが、オンラインによる授業を実施することで対応できると思う。三戸高校だけを対象とするのではなく、例えば津軽地区の高校2～3校に同時配信することで多様な教育が可能になると思う。

また、名久井農業高校は水資源に関する研究で世界一となったことが報道されたように顕著な研究成果を上げていることから、今後も存続し全国からの生徒募集を導入してほしい。

- 階上町の中学生の進路状況については、過去3年間はほぼ同じ状況となっており、卒業生の約5割は生活圏である八戸市内の県立高校へ、約3割強は八戸市内の私立高校へ、約2割は他地区の私立高校等へ進学している。進路の特徴

として、町が県境にあることから、岩手県北への進学者も毎年いることが挙げられる。

階上町の視点からは、今後の八戸市内の学校規模や配置が大きな関心になる。ただ、他の委員からもあったように、三八地区全体のバランスを考慮せず検討を進めることは危険であると考えている。例えば職業教育を主とする専門高校を例にすると、階上町から農業高校へ進学する生徒は少なからずいるが、八戸市内に農業高校はないので、最寄りの農業高校としては名久井農業高校となり、青い森鉄道等の公共交通機関により通学している生徒もいる。八戸市内と三戸郡のそれぞれの状況を総合的に判断し、検討を進めていただければありがたい。

- 新郷村内の中学生の進路としては、ほとんどが八戸市内の高校へ進学している状況にある。新郷村は、令和3年4月から小学校1つ、中学校1つに統合することとしている。生徒数は3年生だけで20人弱であるが、それぞれが進路希望を持って学習しており、子どもたちの希望が叶うような高校教育改革をお願いしたい。

村が独自に検討していることとしては、例えば下宿に対する支援がある。公共交通機関を利用して高校に通学できないことから、家庭の経済的負担が大きくなっており、奨学金の体制等を整えながら支援することとしている。このことによって、少しでも子どもたちのためになれば良いと考えている。

各委員からあったように三戸郡にも是非高校を残していただきたいと考えている。

- 保護者の希望としては、通学を含め、安心・安全で多様な選択肢の中で高校教育を受けられることが高いニーズとしてあると思う。また、多くの子どもたちの中で高校教育を受けたいという要望もあると思う。相反するような要望かと思うが、この点を勘案していただき、今後の検討を進めていただきたい。

- これまでの各委員の意見と同様に三戸郡の高校の存続を望む。親として、子どもたちがより良い学習環境の中で育ってくれば良いと思う。

子どもたちは高校卒業後、県外に進学する者もいるが、青森に帰ってくる人材が少ない。青森県に対しての要望となるが、若者が県内で仕事ができる環境を作ってもらえば、少子化問題等を解決することにつながるのではないかと考えている。県外に出た人たちが青森県に戻ってきて、家族を持つことで高校が減ることがなくなると考えている。

- 事務局には、たくさんの資料を提供いただき感謝する。分かりやすい資料であり、さらに多くの分析により、数字で評価していることに感心した。

P T Aの立場としては、三八地区において喫緊の課題になっている三戸高校及び名久井農業高校の存続を希望する。また、これからも人口減少が進んでいく中でこの2校だけの問題ではなく、八戸市内の高校も含め、三八地区の全て

の高校の存続を希望する。

その上で、どのように学級減するかを今後議論していくことになると思うが、各委員からあったように、例えば重点校・拠点校・地域校は存続したいが、最終的には募集人員の問題が関わってくる。

また、募集停止等の情報が公になると、保護者はその報道や発表に応じて、自分の子どもたちの将来を前もって決めてしまうこともあるので、できれば発表については極めて慎重にしてほしい。

- 三八地区の高校は、できるだけそのまま存続することを希望したい。これからの人口減少に当たって、高校生の存在や学校と連携し地域の活性化を図っていく事業であったり、イベント等での活用が求められてくると思うので、地元で学べる環境を用意し、できる限り地域の中学生の選択肢が広がる形にしてほしい。経済的な背景や家庭の事情もあるので、遠距離通学しかできないというのではなく、多くの選択肢の中から通学できる高校があるというのは非常に良いことだと思うので、できるだけ募集停止がない形が望ましい。

また、コロナ禍でテレワーク等、インターネットやパソコンを活用した働き方が出てきたが、学びにおいてもICTを活用し、学校規模の標準より学級数が少なくても豊かで充実した学びが得られるようなことも考えながら検討を進めていくことが必要なのではないか。

- 三戸地域では、五戸高校、田子高校が募集停止となったため、次は三戸高校がなくなるかもしれないという話がある。現在、三戸中学校を卒業した約半数の生徒は、八戸市内や隣接する二戸市内の高校へ進学しているため、結果として三戸高校の生徒数が減少し全体的な学習環境の向上を図るのは難しい状況かもしれない。

仮に三戸高校がなくなれば、子どもたちは他地域へ進学するしかなく、三戸町から八戸市や二戸市へ通学する生徒の多くは電車を利用することになる。三戸駅から八戸駅までの6か月通学定期券は5万8,720円、三戸駅から二戸駅までの6か月通学定期券は6万5,020円であり、通学時間も1時間以上となる。コロナウイルスの影響により経済状況が悪化しているため、通学費をかけることのできない家庭も出てくると思う。高校に通いやすくするために、通学バスを出したり、通学費を負担する制度があれば、家庭が助かると思うが、それを理由に地元の高校ではなく、八戸市内や二戸市内の高校に入学する生徒も多くなるかもしれない。できれば地元の高校に通える環境を整えてほしい。

そして、「この高校で勉強したい」、「この高校で部活を頑張りたい」と思える学校づくりも大切だと思う。

- 地域校である田子高校が残念ながら募集停止になった。隣接する三戸高校が地域校となって、田子高校と同じような運命をたどってしまうとなれば、この

地域だけがぽっかりと高校の穴が開いてしまうことになる。三八地区全体を考えれば、地域バランスをとることも必要であり、慎重に検討していく必要がある。

もう一つは、遠方から高校に通わせている保護者にとって、通学手段に大きな関心があると思う。公共交通機関の利用といっても限界があると思うので、例えば町村と連携してスクールバスを出せるような仕組みを作ることや、遠方からの子どもたちの受け皿となる高校へ寮を完備すること等も併せて考えていく必要がある。

- 将来構想検討会議答申の冒頭に「単なる生徒数減少への対応策ではなく、これまでの発想を転換し、県全体が一丸となって取り組むことやオール青森の視点」が示されているので、このことを踏まえ2点述べたい。

1点目は、資料5にあるように、三戸郡において「地域を支える人財の育成」は大変重要である。小学校においても、地域に誇りを持ち、地域に貢献しようとする子どもを育てることに力を入れている。したがって、三戸郡の高校については、引き続き地域や社会を支える人財を育成する高校として存続できるようにお願いしたい。

2点目は、五戸高校が来年度末で閉校となることによる影響である。五戸町の中学生は、卒業すると全ての生徒が町外の高校へ進学することになり、それに伴って、小学校から中学校に進学する際、地元の中学校ではなく町外の中学校へ進学する子どもが増えており、中学校の学級数が減る事態も既に出ている。また、五戸高校が閉校となることで、地域の祭りやボランティア活動等に支障が出始めているのも事実である。このようなことにならないためにも、三戸郡の高校は存続してほしい。

特色や魅力ある高校づくりにより、生徒数を確保する取組を市町村とともに実施していただきたい。ある程度の学校規模は必要かと思うが、規模にとらわれて、画一的な高校教育改革にならないようお願いしたい。学校数は違うが、鳥取県は令和7年度まで高校を再編するのではなく、原則として学級減で対応するというのを聞いている。高校教育改革は、これからの地域づくりやふるさとづくりに直結する重要な課題だと思うので、これまでの発想を転換し、オール青森の視点で新しい青森モデルをつくるという意気込みで取り組んでいただきたい。

- 青森県内には17校の私立高校があり、そのうち三八地区には6校ある。野辺地西高校と松風塾高校を除いて、全て市部に設置されている。三戸郡の生徒が私立高校に通い、地域に御迷惑かけている部分も多々あるかもしれない。

私立高校は県教育委員会の管轄ではなくて、総務学事課という知事部局の管轄となるため、高校教育について同じテーブルで一緒に考えることはできなかったが、今回を機に地元の生徒たちを教育している機関として、私立高校の存在を少し意識した高校教育改革をオール青森の視点で実施できると良い。

○ 重点校・拠点校については、事務局からその取組について詳しい説明がなかったもので、後ほど八戸高校の校長から重点校の取組について情報提供いただきたい。ただ、聞くところでは取組がうまくいっているようであり、ドリカム人づくり推進事業や医学部進学に向けた事業を取り入れながら、重点校らしい取組を展開しており、また、周辺高校の教員を巻き込んだユニークな取組を展開し、重点校としての役割を果たしていることは聞いている。重点校については継続して良いと思う。

また、三八地区では八戸工業高校が拠点校になっており、事務局説明にあったように十和田工業高校と連携しながら、様々な体験活動に取り組み、成果を上げており、拠点校についても継続して良いと思う。

地域校については、各委員から三戸郡に高校を残したいという意見があり、私も全く同じ考えである。三戸高校を存続させるためには、地域校とするしか方法がないのではないかと思う。そうしなければ、このまま入学者数が減少し、募集停止となる可能性があるので、地域校として設置し特色ある小中一貫の三戸学園と三戸高校が一体となり、更に教育改革を進めることで存続させることを考えれば良い。特色ある学校を作っていただきたい。

八戸中央高校は三部制の素晴らしい学校である。夜間部については入学者数が少なくなっているが、三部制で生徒を集めており、地域には絶対に必要な学校であり、どんなことがあっても残さなければならない。定時制は三部制のまま存続するのが良い。また、通信制は学費が非常に安く、高校生活を再スタートする学校としての意義がある。今後も三八地区に定時制・通信制高校を残していきたい。

■ 事務局から、欠席した委員から提出された意見等記入票の意見を紹介した。
→ (事務局) 重点校及び拠点校が実施する教育活動への各高校の生徒の参加や学習成果の共有等を通して、本県全体の高校教育の質の確保と向上を図ろうとする取組は評価できる。各高校の連携を一層強化することが重要であると考える。

重点校に併設型中高一貫教育を導入することについては、キャリア教育の視点から6年間を見通して、生徒一人一人の個性や能力を伸長することにおいて効果を上げることが期待できると考えるが、中学受検による経済格差や教育格差を生じることが懸念される。本県で導入済みの三本木高校及び附属中学校について、メリットとデメリットを十分に検証した上での検討をお願いしたい。

通学区域をオール青森の視点により県下一円とするほか、地域ごとに卒業後の進学から就職まで、幅広く中学生自身の希望進路に応じた高校を選択できる環境を維持している努力に感謝する。これからの時代に求められる力を生徒が身に付けられるよう、充実した教育環境を整備するためには、学校規模の標準を満たす、あるいは望ましい学校規模である必要があることは理解できるが、募集停止や統合をすることとなった場合、その地域の公共交通機関も十分でないことが考えられるため、スクールバスの運行や通学費の補助、下宿や奨学金の支援策等を検討する必要がある。

(休憩)

■ 進行役から、八戸高校に対し、重点校の取組状況について説明を求めた。

○ (八戸高校) 八戸高校における重点校の取組状況について説明する。これまで学校間連携について、それほど強い意識を持っていなかったが、重点校の指定を受けてからは積極的に地域の高校、教員、生徒と一緒に人材育成をしていくという考えに変わったことが大きな変化だと思う。

取組内容は、八戸高校がこれまで実施してきた取組を地域の高校へ還元することを基本スタンスとしており、新たな事業を計画することはしていない。主に進学を希望する生徒が進路を達成するための研修や講習の合同開催等により、お互いに刺激し合い、先生方が意見交換する場が生まれており、このことがきっかけとなり、重点校の取組として良い結果につながっていると考えている。今後もこの方向性で重点校の取組を進めていきたいと考えている。

■ 進行役から、重点校・拠点校を第2期実施計画期間において、第1期実施計画と同様に配置することについて確認し、委員からは特に異論はなかった。

■ 進行役から各委員からの意見発表を踏まえ、更なる意見や質問がないか確認したところ、委員から次の質問があった。

○ 2学級規模の高校において2年間連続して入学者が40人以下だと1学級になり、1学級規模の高校は2年連続して入学者が2分の1未満になると募集停止になるとのことだが、地域校に指定されることでその基準が変わるのか、また、地域校に指定されない場合の募集停止となる基準があるのか確認したい。

→ (事務局) 地域校の考え方については、資料5概要版の3ページを確認いただきたい。2学級規模の地域校については入学者数が40人以下の状態が2年間継続した場合、原則として翌年度に1学級とする。これは従来からの原則である。

1学級規模の地域校については、募集人員に対する入学者数の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合、募集停止に向け、協議することとしている。

○ 地域校に指定されなくても、この基準に従って募集停止になるということか。

→ (事務局) 地域校に指定されない場合の対応として、小規模校については、基本方針で定める学校規模の標準である4学級を満たしていないことから、学級減や統廃合の対象として捉えることになる。

○ 3学級以下の高校は五戸高校のように、急に統廃合の対象になるということか。

→（事務局） 急に統廃合の対象とするのではなく、このような地区意見交換会を開催し、三八地区の学校配置について御意見を提案いただきながら検討しているところである。

○ 三戸高校には隣接する二戸市内の生徒も入学している。また、田子町、南部町、新郷村、五戸町からも生徒が入学しており、辺地や県境の子どもたちの教育機会の確保につながっていると思う。1学級になった途端、突然募集停止になるのは困るので、例えば三戸町が通学支援等を行った上で、募集停止の基準に該当したら再編すると示された方が町や地域が協働して取り組んでいく体制ができ、この地域の高校教育の機会の確保につながると思うので、町や地域が努力し生徒数を確保すれば高校が存続する形にしていただければありがたい。

○ 三戸高校が地域校となった場合はマイナス2学級ということであれば、郡部の高校は三戸高校1学級、名久井農業高校2学級なので、マイナス2学級を実現するためには、八戸市内の高校からマイナス2学級をするという理解で良いか。

→（事務局） 県教育委員会は、学校配置の試案を持っていない。検討のルールとして、三八地区で地域校を指定したとすれば、学級減の数をマイナス3学級からマイナス2学級とし、どの学校を対象に学級減にしたらいいのか、御意見をいただければ、それを基に第2回地区意見交換会においてシミュレーションとして提案し、三八地区の学校配置を検討していきたいと考えている。

この場での御意見が難しい場合、意見等記入票へ御意見を記入し提出いただきたい。

■ 進行役から、定時制・通信制課程を第2期実施計画期間において、第1期実施計画と同様に配置することについて確認し、委員からは特に異論はなかった。

（2）多様な教育制度等について

■ 事務局から、資料9について説明した。

■ 委員から次のような意見があった。

○ 隠岐島前高校は半分以上が県外生ということだが、島根県では多くの高校で全国からの生徒募集を導入している。調べたところ、島根県では高校の60%が寮を持っており、他県と比較して圧倒的に多いようである。全国からの生徒募集を導入する際には、下宿ということもあるが、寮があれば良いと考えている。

葛巻高校は県外生が増え、1年生が14名となっているが、分かる範囲で県外生の住環境についてお知らせ願いたい。

○ 資料9に記載があり、町営の寮で生活している。

■ 事務局から、欠席した委員から提出された意見等記入票の意見を紹介した。

→ (事務局) 本県全ての高校を対象とし、生徒募集の導入範囲や方法に制限がない場合、本県生徒の県立高校進学希望及び合格率への影響が懸念される。職業教育を主とする専門学科に限り導入するか、あるいは地域活性化策と併せて地域に根差した教育活動を特色とし、在学中も含め、卒業後にもメリットがあることを打ち出すなどして、本県の高校で学びたいと思うような魅力を発信する工夫が必要であるとする。

○ 島根県で行われた校長会の全国大会に出張した際、全国からの生徒募集の実施状況について知った。特に島根県や鳥取県では、約半数の高校に県外生が在籍しており、隠岐島前高校に限らず、中国地方では関西地方と盛んに交流しているようであった。

全国からの生徒募集を全ての県立高校へ導入するとすると、他の委員からあった懸念が考えられる。また、県外生に対し「不登校等の問題を抱えているから本県に来たのではないか」などという目で見ること懸念されるため、例えば研究活動で全国からの注目度の高い名久井農業高校や、動物科学科に対し全国から問い合わせがある三本木農業高校といった専門高校に導入範囲を限定することが考えられる。これまで本県では、県外生の受入れについては、一家転住すること等の条件があり、断ってきた事例が多々ある。

また、スポーツ関係で他県へ進学している事例はたくさんあり、逆に本県においてもスポーツ関係で他県から生徒を受け入れることは考えられる。三本木農業高校の相撲部には実際に問い合わせがあった。

したがって、全国からの生徒募集については、全ての県立高校へ導入するのではなく、特色ある学校や学科において入学者数に上限を決めて、本格的に実施することが必要だと考える。

また、三戸高校が地域校となるならば、生徒数確保の一つの手段として、三戸高校の特色を全国に向け発信しながら、全国からの生徒募集を導入することも考えられるのではないかと考える。

○ 名久井農業高校には寮が完備されており、また、高校の始業・終業時刻に合わせて電車やバスの運行について関係機関と調整している。水資源に関する研究で世界一となっているので、研究活動に取り組みたい生徒がいれば受け入れられるようにした方が良く思う。

南部町としては、名久井農業高校に全国からの生徒募集が導入されることになるのであれば、補助を検討する必要があると考えている。名久井農業高校は特色のある学校であり、全国からの生徒募集を導入することが考えられるのではないかと考える。

- 他の委員の意見に賛同する部分があるが、課題として挙げられている県内生徒の募集人員枠の減少が危惧される部分である。県内の子どもたちが自分が希望する高校に進学する可能性が狭くなることは、最もあってはならないことである。

一方で、本県は第一次産業が盛んであり、将来的なことを考えると、第一次産業の担い手の候補が進学する、または進学を検討する際の選択肢の一つになるのであれば、有意義なことである。

- 県外生がこの地域の良さ等を理解すれば、家族等がこの地域を訪れることにつながると思う。また、高校卒業後、県外生が本県を離れることになったとしても、この地域を愛してもらうことができれば、地域のことを県外で発信してくれる心強い人材になると思うので、八戸市内の高校の倍率等に影響を及ぼさない程度に、制限をかけながら、県外や海外の生徒を受け入れることを試みて良いと思う。

- 2点確認したい。まず、1点目は資料5の地域校への対応である。1学級規模の地域校については、募集人員に対する入学者数の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合は、募集停止が基本となることは分かったが、その際、通学が困難となる地域の生徒の通学について、当該高校の所在する市町村等と連携を図りながら対応を検討することについて、もう少し具体的な説明をお願いしたい。

2点目は、三八地区の高校でマイナス2学級を行わなければならないとして、資料8で示されている入学者数の定員充足率を基にオートマチックに学級減の対象校を絞ることになるのか確認したい。これから議論を進めていくに当たり、ポイントになると思うので、説明をお願いしたい。

- (事務局) 1点目の地域校に関する市町村との協議については、高校を募集停止した場合、最寄りの高校へどのような通学方法があるか等、募集停止後の生徒の通学手段の確保や卒業証明書等の各種証明書発行について、当該市町村と協議を行っているところである。

2点目の学級減の考え方について、三八地区においてはマイナス3学級またはマイナス2学級の学級減が必要であり、この数をどのような方法で減ずるかといった検討の観点についても、御意見をいただきたいと考えている。観点として、定員充足率、または別のデータを使うことも考えられるところであり、御意見をいただきたい。

- 進行役から、事務局に対し、委員の意見に基づく具体的な学校配置シミュレーションを作成するよう指示があった。

5 閉会